



Title	コリャーク語の形態的・統語的能格性 : 動詞の一致と節連接を中心に
Author(s)	呉人, 恵
Citation	北方人文研究, 6, 47-64
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/52612">http://hdl.handle.net/2115/52612</a>
Type	bulletin (article)
File Information	jcnh06-03-KUREBITO.pdf



[Instructions for use](#)

## コリヤーク語の形態的・統語的能格性 —動詞の一致と節連接を中心に—

呉人 恵

富山大学

### 1. はじめに

本稿<sup>1</sup>では、コリヤーク語 (Koryak) の能格性を、動詞の一致ならびに等位構文、複文といった節連接に焦点をあてて検証する。

能格タイプといわれる言語でも形態的にも統語的にも一貫して能格タイプを示す言語は少なく、多くの言語は程度の差こそあれ、能格と対格の中間的な性質を示すことはこれまでも指摘されてきたとおりである (Dixon 1994)。また、形態的には一貫した能格性を示す言語が、統語的には主格・対格的な操作をおこなうことが多いこともまたよく知られているとおりである (Comrie 1979)。

これらの指摘はコリヤーク語についてもあてはまる。すなわち、コリヤーク語は名詞の格標示においては一貫した能格性を示すのに対し、動詞の一致や節連接においては対格性と能格性が混在している。しかし、コリヤーク語のこのような能格性の実相を形態・統語両面から全体的に整理して示した先行研究は、管見のかぎり見られない。

一方、同系のチュクチ語については、名詞の格標示において一貫した能格性を示す一方で、動詞形態法においては能格型と対格型の分裂を示すことはこれまでも指摘されてきた。とりわけ、動詞の一致システムは、その複雑さから研究者の関心を引きつけてきた (Bobaljik 1998, Comrie 1979, 1981, Nedjalkov 1979)。また、統語面における能格性・対格性については、Comrie (1979) で、否定分詞構文、不定動詞構文、Nedjalkov (1979) で等位構文、A と S の所有標識が取り上げられている。ただし、Comrie (1979) はチュクチ語で唯一、統語的能格性がみられるのは否定分詞構文だけとしているのに対し、Nedjalkov は等位構文では S=A の読みが普通だが、コンテキストにより S=O の読みが可能となる場合もあるとしている。このように、チュクチ語においても能格性の全体像については、まだ十分に明らかにされているとはいえず、包括的な記述が俟たれるところである。

本稿ではこれらの先行研究を踏まえ、今後、コリヤーク語の形態・統語の能格性の

<sup>1</sup> 本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(B))「北東アジア危機言語の記述と類型に関するネットワーク構築」(代表:津曲敏郎[北海道大学], 22320075)により、2012年10月8日~10月15日にロシア連邦ハバロフスク市でおこなったコリヤーク語聞き取り調査に基づき書かれたものである。調査には、Ajatginina Tat'jana Nikolaevna氏(1955年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第5トナカイ遊牧ブリガード生まれ、女性)に協力していただいた。ここに記して謝意を表したい。

なお、本稿の対象となるコリヤーク語は、チャウチュヴァン(cawcəvan)方言である。チャウチュヴァン方言の音素目録は以下のとおり: /p, t, t', k, q, v, ʧ, ʤ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə/. /t', n', l'/ はそれぞれ /t, n, l/ の口蓋化を表わす。/c/ の音価は [tʃ]。

度合いについて全体的な考察を深めていくために、まずは能格性を考える上でのポイントとなる主要な形態的・統語的現象を取り上げ検討する。具体的には、名詞の格標示、動詞の一致、節連接を考察の対象とする。節連接では、能格性の度合いについて対照的な特徴を示す等位構文ならびに名詞修飾節をもつ複文を中心に考察する。

本稿の構成は次のとおりである。第2節では、コリャーク語の名詞・動詞における形態的能格性の度合いを検討する。第3節では等位構文と名詞修飾節における統語的能格性の度合いを検討する。また、まだ十分な調べができておらず、限られたデータではあるが、副詞節と不定詞構文についてもあわせて暫定的な報告をおこなう。

## 2. 形態的能格性

### 2.1. 名詞の格標示

コリャーク語の名詞における格標示は、一貫して能格性を示す。ただし、コリャーク語には（おそらく人称代名詞以外には）能格専用の格がなく、場所格か道具格が代用される。名詞は、能格がどの標識をどのように受けるかにより、大きく次の4つのグループに分類される（呉人 2002）。

- A : -nan という能格専用形式<sup>2</sup>をもつ名詞
- B : 場所格 -k が代用される名詞  
(-k の直前に有生標識 -ne/-na (単), -jək (複) あり)
- C : 定性により場所格 -k (定) か道具格 -te/-ta (不定) が使い分けられる名詞  
(-k の直前には有生標識あり, -te/-ta の直前には有生標識なし)
- D : 道具格 -te/-ta が代用される名詞 (有生標識なし)

A グループの名詞は人称代名詞のみである。場所格が代用される B グループには、人間や家畜を表す固有名詞、疑問代名詞「だれ」、親族呼称が含まれる。定か不定かにより場所格か道具格が代用される C グループには、人間名詞、指示代名詞、「どの」を表わす疑問代名詞などが含まれる。道具格が代用される D グループには、親族名称、動物名詞、無生物名詞が含まれる（表1参照）。能格標示の違いに反映されるこのような名詞の区別は、これまでシルバーステイン (Silverstein 1976) らによって指摘されてきたいわゆる名詞句階層におおよそ対応している。

<sup>2</sup> ただし、-nan は、有生を表す -na と固有名詞や親族呼称に付加される所有形 -n が結合したものである可能性も否定できない。-n については次の例をみられたい。

e.g. Notajava-n-Ø                      icʔ-ə-n  
 Notajava-POSS-ABS.SG      fur.coat-E-ABS.SG  
 「ノタージャヴァの毛皮服」

表1 コリヤーク語の能格標示にみられる名詞句階層

	A	B	C	D
能格標識	-nan	-ne-k/-na-k, -jək-ə-k	-ne/-na-k,-jək-ə-k ~ -te/-ta	-te/-ta
名詞の種類	人称代名詞	固有名詞／親族 呼称／「だれ」	人間名詞／指示 代名詞／「どの」	親族名称／動物名詞 ／無生物名詞

次の (1) から (4) は, A, B, C, D のそれぞれに該当する名詞が能格で現れている例である。該当する部分は下線部で示す。

## (1) 【A：人称代名詞：専用形式 -nan】

Mocy-ə-nan məc-ca-jta-la-ŋ-ə-n əjava-k  
 IPL-E-ERG 1PL.A-FUT-fetch-PL-FUT-E-3SG.O remote.place-LOC  
 va-lŋ-ə-n ineŋ-Ø  
 be-PART-E-ABS.SG freight.sledge-ABS.SG  
 「私たちは遠くにある貨物用橇を取りに行こう。」

## (2) 【B：固有名詞：有生標識＋場所格 -na-k】

L'ane-na-k tejk-ə-ni-n-Ø icŋ-ə-n qəlavol-ə-ŋ  
 Lyage-AN.SG-LOC(ERG) make-E-3SG.A-3SG.O-PF fur.coat-E-ABS.SG husband-E-DAT  
 「リヤゲ（女性名）は夫に毛皮コートを縫った。」

## (3) 【C：人間名詞：有生標識＋場所格 -na-k／道具格 -ta】

El'ŋa-na-k / El'ŋa-ta yəcci ne-ku-ŋeŋew-wi  
 woman-AN.SG-LOC(ERG) woman-INSTR(ERG) 2SG.ABS INV-IPF-call-2SG.O  
 「その女／女がお前を呼んでいる」

## (4) 【Dグループ：動物名詞：道具格 -ta】

ŋanko qoja-ta ku-nu-ŋ-ni-n pəŋo-n  
 there reindeer-INSTR(ERG) IPF-eat-IPF-3SG.A-3SG.O mushroom-ABS.SG  
 「あそこでトナカイがキノコを食べている。」

## 2.2. 動詞の一致

名詞の格標示に対し、動詞の一致においては能格型と対格型の分裂がみられる。

動詞の屈折体系は、基本的に完了／不完了というアスペクトと未来／非未来というテンスが組み合わさってできている。ちなみに、直説法には、非未来には完了の結果相とアオリストの2形式、不完了の1形式、未来には完了、不完了それぞれ1形式で、自動詞・他動詞とも、それぞれ5つの屈折形式があることになる。また、自動詞には主語の人称・数、他動詞には通常、主語と目的語の人称・数が標示される。

下表2は主語が1人称単数の場合の自動詞 tawjiŋ「咳する」の5つの屈折形式、下

表3は主語が1人称単数、目的語が3人称単数の場合の他動詞 pɲəlo「尋ねる」の5つの屈折形式を示したものである。

表2: 自動詞 *tawjiŋ*「咳する」の屈折形式 (1SG. S. IND)

		非未来		未来
完了	結果相	アオリスト		
	ɣa-tawjiŋ-iɣəm	t-ə-tawjiŋ-ə-k		t-ə-ja-tawjiŋ-ə-ŋ
不完了	t-ə-ku-tawjiŋ-ə-ŋ			t-ə-ja-tawjiŋ-eke

表3: 他動詞 *pɲəlo*「尋ねる」の屈折形式 (1SG. S/A; 3SG. O. IND)

		非未来		未来
完了	結果相	アオリスト		
	ɣa-pɲəlo-len-Ø	t-ə-pɲəlo-n-Ø		t-ə-ja-pɲəlo-ŋ-ə-n
不完了	t-ə-ko-pɲəlo-ŋ			t-ə-ja-pɲəlo-jk-ə-n

これら形式のうち、結果相 (Resultative) だけが一貫してシンプルな能格型を示す。下表4は自動詞、他動詞の一致の標識を示したものである。網掛け部分はSとOの標識を示す部分であるが、一貫して同形式であることに注目されたい。

表4: 結果相の人称標識

	自動詞	他動詞	
	S	A	O
1 単	-ɣəm	-Ø	-ɣəm
2 単	-iyi/-eye	-Ø	-iyi/-eye
3 単	-lin/-len	-Ø	-lin/-len
1 双	-muji/-moje	-Ø	-muji/-moje
2 双	-tuji/-toje	-Ø	-tuji/-toje
3 双	-linet/-lenat	-Ø	-linet/-lenat
1 複	-muju/-mojo	-Ø	-muju/-mojo
2 複	-tuju/-tojo	-Ø	-tuju/-tojo
3 複	-linew/-lenaw	-Ø	-linew/-lenaw

一方、それ以外の屈折形式では、おおまかにいえば、能格型 (2 双・複) と対格型 (1 単・複, 2 単, 3 単複) の混在がみられる (表5参照)。すなわち、能格型を示すのは接尾辞 *-tək* (2 双複), 対格型を示すのは接頭辞 *t-* (1 単), *mət-* (1 複) とゼロ (2 単, 3 単) である。斜線部分はSとAが同形式である対格型, 網掛け部分は、SとOが同形式である能格型を示している (斜線と網掛けが重なっている2人称複数については、後述する)。

表 5：非未来不完了の人称標示

	自動詞	他動詞	
	S	A	O
1 単	t-	t-	ine-/ena~-γəm <sup>3</sup>
2 単	∅	∅	-yi/-ye
		ne-/na-	
3 単	∅	∅	-n
		ne-/na-	
1 双	mət-	—	-mək
2 双	-tək	—	-tək
3 双	-ŋi	—	-net/-nat~-n
1 複	mət-(-la)	mət-	(-la)-mək
2 複	(-la)-tək	(-la)-tək	(-la)..-tək
		ne-/na-	
3 複	(-la)-∅	ne-/na-	-new/-naw~-n

ただし、動詞の一致はいくつかの要因により、次のように複雑な様相を呈している。

- ① 双数他動詞主語を表す人称代名詞がないことと呼応して、動詞の側にも双数主語を表す手段がなく、対格型か能格型かというタイプ分けの対象外となる（表の—の部分）。
- ② 他動詞の主語と目的語が 1 人称 > 2 人称 > 3 人称単数 > 3 人称複数という階層に逆行する場合、目的語の人称・数は標示されるが、主語の人称・数ではなく、反転標識 ne-/na- が付加されるため（2, 3 人称単・複主語の場合）、対格型か能格型かというタイプ分けの対象外となる（表のイタリック部分）。
- ③ 2 人称複数主語の場合には、目的語の人称によりさらに能格型と対格型に分裂する。すなわち、1 人称単数目的語 ine-/ena- を取る場合のみ対格型を示し、それ以外では反転標識が付加される（表の 2 複の A の部分）。
- ④ カッコに入れた複数標識 -la は、1 人称では能格型、2 人称では、1 人称単数目的語の場合のみ対格型、それ以外では能格型を示す。3 人称では、3 人称複数主語 (-la)-∅ と 3 人称複数目的語 -new/-naw~-n は異なる標識を取る（表の 1, 2, 3 人称複数の部分）。

以上を踏まえ、対格型と能格型の振り分けの対象になる人称・数についてのみ動詞の一致の格組織のタイプを簡略的に示すと次のようになる。なお、対格型と能格型の分布を連続的にとらえるために、人称や数の順序は通常のそれとは違う部分があることに注意されたい。

<sup>3</sup> 1 人称単数目的語を示す形式には ine-/ena- と-γəm があるが、後者は主語が 3 人称複数である場合にのみ付加される。

表6：動詞の一致のタイプ

1人称		3人称	2人称		
単	複	複	単	複	双
対格型				能格型	

### 3. 節連接における能格性

以上、単文における名詞と動詞の能格性の度合いについてみてきた。次に、等位構文や複文といった節連接の際にみられる能格性の度合いについて考察する。対象とするのは、等位構文と名詞修飾節を含む複文である。

#### 3.1. 等位構文

上述のとおり、Nedjalkov (1979) は、コリヤーク語と同系のチュクチ語の等位構文について、対格的な S=A の読みが普通だが、コンテキストによっては能格的な S=O の読みが可能となる場合もあるとして、次のような例をあげている（表記・グロス・訳は Nedjalkov [1979] に従う）。(5) は S=A の読みの例、(6) は S=A の読みも S=O の読みも可能な例である。

- (5) ətləg-e piri-nin milger ənkʔam [ətlon] wakʔo-gʔe  
 father-ins. take-3sg.→3sg. rifle(abs.) and he(abs.) sit.down-3sg.  
 ‘The father took the rifle and [he] sat down.’

- (6) ətləg-e talaywə-nen ekək ənkʔam ekwet-gʔi  
 father-ins. beat-3sg.→3sg. son(abs.) and leave-3sg.  
 ‘The father beat his son and [father or son] left.’

Nedjalkov (1979) はまた、このように対格的な読みも能格的な読みも可能な場合があることについて、文脈から明らかな場合に S や A がしばしば省略されるチュクチ語のような言語では、S と O を統語的に同一視する手段に対して中立的であることがかわっているのではないかと推測している。

このことに関連して、等位構文や複文についてみる場合、まず抑えておかなければならないのは、二つの節の S と A あるいは S と O が 3 人称かつ同一の数である場合が対象となるということである。なぜならば、コリヤーク語では(チュクチ語も同様に)、S, A, O の人称・数は 2.2. でみたように、動詞に標示され、曖昧性が生じる余地がないからである。したがって、当然のことながら、S と A あるいは S と O が異なる人称あるいは数であれば、S=A (7) も S=O (8) も可能となる。

- (7) Enʔpici-te juleq k-in-uʔet-ə-ŋ-Ø to ŋanqo  
 father-INSTR(ERG) for.a.long.time IPF-1SG.O-wait-E-IPF-3SG.A and after.that

ŋəto-j-Ø ŋajŋəno-jtəŋ.

go.out-PF-3SG.S outside-ALL

「父親は長いこと私を待ち、その後、彼は表に出た。」

- (8) En'pici-te k-in-uŋet-ə-ŋ-Ø to jaqam  
 father-INSTR(ERG) IPF-1SG.O-wait-E-IPF-3SG.A and immediately  
 t-ə-jet-ə-k.

1SG.S-E-come-E-PF

「父親は私を待ち、私はすぐに来た。」

チュクチ語同様に S や A がしばしば省略されるコリヤーク語では、基本的には先行節が自動詞であっても他動詞であっても（いいかえれば主語が絶対格を取っても能格をとっても）、後行節は先行節の主語を主語とする。

- (9) En'pic-Ø jet-ti-Ø to vetɣa ʕejŋew-ni-n-Ø  
 father-ABS.SG come-PF-3SG.S and immediately call-3SG.A-3SG.O-PF

「父親は来て、すぐに（父親は/\*誰かが）彼/彼女（≠父親）を呼んだ。」(S=A)

- (10) En'pici-te ʕejŋew-ni-n-Ø kəmiŋ-ə-n to  
 father-INSTR(ERG) call-3SG.A-3SG.O-PF child-E-ABS.SG and  
 ʕeqev-i-Ø jaw-yele-nv-ə-ŋ.

left-PF-3SG.S ptarmigan-search-place-E-DAT

「父親は子供を呼んで、（父親は/\*子供は）雷鳥を捕まえに行った。」(A=S)

もし、S=O の読みをしたい場合には、上述のチュクチ語の例とは異なり、通常、後行節に指示詞 ŋajen 「あれ」か人称代名詞 ənno 「彼/彼女」を入れて明示しなければならない。

- (11) En'pici-te janot ko-kətʕajŋa-ŋ-ne-n kəmiŋ-ə-n to  
 father-INSTR(ERG) first IPF-scold-IPF-3SG.A-3SG.O child-E-ABS.SG and  
 ʕataw ŋaje-n ɣe-ɣentew-lin.

simply that-ABS.SG RES-run.away-3SG.S

「父親は子供を叱り、彼（=子供）は逃げた。」

- (12) Qajəkmiŋ-a ʕejŋew-ni-n-Ø cakeɣət-Ø to ənno  
 boy-INSTR(ERG) call-3SG.A-3SG.O-PF sister-ABS.SG and 3SG.ABS  
 ŋəvo-ɣʕe-Ø jaqam ewji-k.

begin-PF-3SG.S immediately eat-INF

「少年は妹を呼んで、彼女（=妹）はすぐに食べ始めた。」





(15) igər a-yoʔ-kə-lʔ-etə enm-etə mən-əlqən-mək.

now neg.-reach-neg.part.-to hill-to 1pl.-go-1pl.

“Now let us go to the hill which (someone) didn’t reach.”

しかし、コリヤーク語の場合には肯定否定いずれの場合でも能格的にふるまう。まずは、肯定の場合について見る。

コリヤーク語には、「行為者名詞 *imja dejtelja*」(Zhukova 1972:137) を形成するといわれる接尾辞 *-lʔ* (LH と略) がある。この接尾辞は、名詞、形容詞、副詞、動詞語幹に接続して「～をもつもの」「～の性質をもつもの」「～するもの」などの意味を表わし、名詞として単独で用いることができる一方で、動詞語幹に接続した場合には、過去あるいは現在の名詞修飾節を形成することもできる。

かたや未来を表わす名詞修飾節の形成には接尾辞 *-lqəl* がかわっている。この接尾辞は、通常、名詞、動詞語幹（動詞の場合には *-jolqəl* の形式 [JQ と略]）に接続して「～の予定のもの」「～する予定のもの」を意味する名詞を形成する一方で、動詞語幹に接続して未来の名詞修飾節を形成することができる。

過去および現在の名詞修飾節を作る LH、未来の名詞修飾節を作る JQ いずれも、そのふるまいは能格的である。すなわち、絶対格形で現れる自動詞主語と他動詞目的語しか主要部名詞として修飾することができない。主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 斜格名詞 > 所有者名詞 > 比較対象という接近可能性階層 (Keenan and Comrie 1977) に照らして見ると、LH、JQ 名詞修飾節は最上位の主語のうち自動詞主語と 2 番目の直接目的語という、上位 2 種類の名詞句しか名詞修飾節化できない。他動詞主語については、同じく能格型言語でありながら名詞修飾節化が可能な言語の例 (バスク語、ワルビリ語、グリーンランド・エスキモー語など) も報告されているが (Keenan and Comrie 1977)、コリヤーク語では名詞修飾節化は許容されない<sup>4</sup>。

次の (16) は、LH 名詞修飾節の述語が、節内の自動詞主語 (単数) にあたる主要部名詞と一致して、絶対格単数を取る例、(17) は節内の自動詞主語 (複数) にあたる主要部名詞と一致して、絶対格複数を取る例である。(18a) は他動詞目的語 (単数) として働く主要部名詞に一致して、絶対格単数を取る例、(19a) は絶対格複数を取る例である。これに対し、他動詞主語を主要部名詞にした (18b) (19b) はいずれも非適格文である。なお、これらの例の LH 名詞修飾節は、時間副詞 *ajɣəve* 「昨日」があることから、過去を表わすことがわかる。また、主要部名詞と名詞修飾節は隣接しているため、文中のどの名詞が修飾されているか判断できないということはない。下例では主要部名詞を下線、名詞修飾節の述語はイタリックで示す。

<sup>4</sup> ただし、コリヤーク語には、他動詞主語を名詞節によって修飾するための逆受動化の手段がある。これについて詳しくは呉人 (2008)、Kurebito (2008) を見られたい。

- (16) ʃojacek-Ø, [ʃamin<sup>5</sup> ajɣøve lejv-ə-lʃ-ə-n tənup-ɣəpəŋ]  
 young.man-E-ABS.SG INTR yesterday walk-E-LH-E-ABS.SG hill-PRL  
 「昨日、山を歩いていた牧夫」
- (17) el'ʃa-w, [ʃamin ajɣøve jaja-k va-lʃ-o]  
 woman-ABS.PL INTR yesterday house-LOC be-LH-ABS.PL  
 「昨日、家にいた女たち」
- (18a) kalikal, [ʃamin ajɣøve qajəkmiŋ-a jəŋ-ə-lʃ-ə-n]  
 book(ABS.SG) INTR yesterday boy-INSTR(ERG) read-E-LH-E-ABS.SG  
 「昨日、少年が読んだ本」
- (18b) \*qajəkmiŋ-ə-n, [ʃamin ajɣøve kalikal jəŋ-ə-lʃ-ə-n]  
 boy-E-ABS.SG INTR yesterday book(ABS.SG) read-E-LH-E-ABS.SG  
 「昨日、本を読んだ少年」
- (19a) jəccət-o, [ajɣøve el'ʃa-ta mel'ot-ɣəɣ-ə-k  
 tendon.thread-ABS.PL yesterday woman-INSTR(ERG) rabbit-hair-E-LOC  
 jəcu-lʃ-o]  
 mix-LH-ABS.PL  
 「女が昨日、うさぎの毛に混ぜた糸」
- (19b) \*el'ʃa-Ø, [ajɣøve jəccət-o mel'ot-ɣəɣ-ə-k  
 woman-ABS.SG yesterday tendon.thread-ABS.PL rabbit-hair-E-LOC  
 jəcu-lʃ-o]  
 mix-LH-ABS.PL  
 「昨日、うさぎの毛に糸を混ぜた女」

未来を表す JQ 名詞修飾節も LH 名詞修飾節と同様に、主要部名詞が名詞修飾節の自動詞主語と他動詞目的語となる能格型を示し、主節の主要部名詞の統語的役割にかかわらず常に絶対格で現われる。すなわち、LH と JQ は、名詞修飾節形成において時

<sup>5</sup> ʃamin は、Moll (1960:27) では г'амын (ʃamən) で現われ、ロシア語では как бы 「なんとかして、どうしたら」と訳されているが、その品詞性や具体的な意味・機能についての記述は管見のかぎり見られない。しかし、ʃamin は実際のコリヤーク語の発話ではきわめて頻出度が高い。その機能のひとつとして、話者が聞き手にすでに既知である陳述内容を聞き手に想起させるというモダリティ標示があげられる。日本語の「ほら」に近い意味を持っている。ここではとりあえず、間投詞 (INTR) としておく。しばしば主要部名詞と名詞修飾節の境界にこのように現れるが、義務的というわけではない。

間の標示を分担しながら相補分布的に機能しているといえる。次例 (20) は主要部名詞が名詞修飾節の自動詞主語に相当するもの, (21a) は他動詞目的語に相当する例, (21b) は他動詞主語を主要部名詞とした非適格文である。

(20) qajəkmiŋ-ə-n, [ʃamin mitiw lajv-ə-jolqəl-Ø tənop-etəŋ]  
 boy-E-ABS.SG INTR tomorrow walk-E-JQ-ABS.SG hill-ALL  
 「明日, 山に行くことになっている少年」

(21a) kalikal, [ʃamin mitiw qajəkmiŋ-a akmec-colqəl-Ø<sup>6</sup>]  
 book(ABS.SG) INTR tomorrow boy-INSTR(ERG) buy-JQ-ABS.SG  
 「明日, 少年が買うことになっている本」

(21b) \*qajəkmiŋ-ə-n, [ʃamin mitiw kalikal akmec-colqəl-Ø]  
 boy-E-ABS.SG INTR tomorrow book(ABS.SG) buy-JQ-ABS.SG  
 「明日, 本を買うことになっている少年」

なお, 自動詞主語と他動詞目的語以外の名詞を修飾するための, 逆受動をはじめとする様々な方策については呉人 (2008), Kurebito (2008) を参照されたい。

ところで, LH・JQ 名詞修飾節の形成において, 主節内での主要部名詞の統語的役割はなんら影響を与えない<sup>7</sup>。すなわち, 主節内での主要部名詞がどのような格標示を受けようと, LH・JQ 節は絶対格でしか現われない。次の (22) は主要部名詞が主節において道具格を取る例, (23) は主要部名詞が与格を取る例である。

<sup>6</sup> akmeccolqəl は, {ekmit} と {-jolqəl} の形態素境界の tj が相互同化により cc に交替した形。強形態素の {-jolqəl} に母音調和により弱形態素の動詞語幹 {ekmit} が同化し, 強形態素 akmec になっている。コリヤーク語の母音調和は, 母音が舌の高低によって強母音 (dominant vowel) (e1, o, a, ə1) と弱母音 (recessive vowel) (i, e2, u, ə2) の 2 系列に分かれ, 1 語に別系列の母音が共起することはできず, 語幹 (あるいは語基) か接辞かという形態素の種類にかかわらず, 強母音が順行的にも逆行的にも対応する弱母音を同化させるというタイプである。強形態素は強母音を含む形態素, 弱形態素は弱母音を含む形態素のことである。

<sup>7</sup> 一方, チュクチ語では, LH に相当する -lʔ が主節内での主要部名詞の統語的役割に呼応して, 格変化する例が報告されている (Comrie 1981:110)。多くの言語において, 主要部名詞の主節での統語的役割が関係節形成の可能性や使用される特定の関係節構造の違いに対して影響を与えないと言われていることを考えると (Comrie 1981:146), チュクチ語のふるまいはむしろ特異であるといえる。



- (29) \*ʔojacek-Ø                    [ʔamin mitiw        qoja-ŋa            qəjəm  
 young.reindeer-ABS.SG    INTR    tomorrow    reindeer-ABS.SG    not  
 akmec-colqəl-Ø]  
 catch-JQ-ABS.SG  
 「明日、トナカイを捕まえないことになっている青年」

### 3.3. 副詞節

副詞節については、調査が十分でないため暫定的な報告にとどめる。ここでは、原因、条件、逆接を表す副詞節について見るが、下例でみるように、筆者のこれまでに集めたデータを見るかぎり、いずれも副詞節で省略されているのは S か O で、能格型を示す。

まず、原因節についてみる。(30) は自動詞述語からなる原因節の例である。

- (30) ənno        alvaŋ        nəʔel-i-Ø,        məjew        unmək  
 3SG.ABS    in.many.ways    become-PF-3SG.S    because        very.much  
 k-ewwece-ŋvo-ŋ-Ø.  
 IPF-drink-HAB-IPF-3SG.S  
 「彼は大酒を飲んでいるから、(彼は) 変わってしまった。」

次の (31)(32) は、他動詞述語からなる原因節の例である。いずれも、原因節で省略されているのは、主節の O である。

- (31) ə-nan        j-ə-panawjij-ni-n-Ø        kəmiŋ-ə-n,        məjew        amu  
 3SG-ERG    CAUS-E-rest-3SG.A-3SG.O-PF    child-E-ABS.SG    because        probably  
 ye-peŋʔivel-lin.  
 RES-get.tired-3SG.S  
 「彼は子供を休ませた、なぜなら(子供は/\*彼は) 疲れたからだ。」

- (32) Məjew ewən=ʔat    qəc-colqəl-Ø    ŋalvəlʔ-etəŋ,    emʔu=qun  
 because    in.any.way    go-JQ-ABS.SG    herd-ALL        so  
 əʔʔ-a        inʔe        ye-n-ewj-el-lin        ŋavakək-Ø.  
 mother-INSTR(ERG)    quickly    RES-CAUS-eat-CAUS-3SG.O    daughter-ABS.SG  
 「(娘が/\*母親が) 群れに行かなくてはならないから、母親は娘を急いで食べさせた。」

(33) は条件節の例であるが、省略されているのは主節の O である。

- (33) Ekilu ewən=ʔat qəc-colqəl<sup>8</sup>-Ø ηelvəlf-etəŋ, əlf-a inʔe  
 if in.any.way go-JQ-ABS.SG herd-ALL mother-INSTR(ERG) quickly  
 je-n-ewj-en-η-ə-ni-n ηavakək-Ø.  
 FUT-CAUS-eat-CAUS-FUT-E-3SG.A-3SG.O daughter-ABS.SG  
 「(娘が/\*母親が) 群れに行かなくてはならないのならば, 母親は娘を急いで  
 食べさせるだろう。」

次の (34) の逆接節においても, 省略されているのは主節の O に相当する名詞句である。

- (34) Qej ewənʔat qəc-colqəl-Ø ηalvəlf-etəŋ, əlf-a  
 although in.any.way go-JQ-ABS.SG herd-ALL mother-INSTR(ERG)  
 malejecya je-n-ewj-en-η-ə-ni-n ηavakək-Ø.  
 slowly FUT-CAUS-eat-CAUS-FUT-E-3SG.A-3SG.O daughter-ABS.SG  
 「(娘が/\*母親が) 群れに行かなくてはならないとしても, 母親は娘をゆっくり  
 食べさせるだろう。」

筆者がこれまで収集した以上の例からみるかぎりでは, 原因, 条件, 逆接の副詞節はいずれも能格的な読みとなる。ただし, これが構造制約にのっとったものか, あるいはコンテキストによるものかについてはこれだけの例からは判断できないため, さらなるデータの検証が必要である。ちなみに, 副詞節に主語や目的語が明示される場合には, (35)(36)のように S=A も S=O も許容される。コリヤーク語では主語や目的語の出現は義務的ではなく省略も可能なため, 読みの判断にコンテキストが関与している可能性も否定できない。

- (35) Ekilu ənno je-jet-ə-η-Ø mojka-jtəŋ, to ewən=ʔat  
 if 3SG.ABS FUT-come-E-FUT-3SG.S 1PL-ALL and in.any.way  
 meki=ηən ja-kətʔajŋa-η-ne-n  
 who(ABS.SG) FUT-scold-FUT-3SG.A-3SG.O  
 「もし彼がうちに来たら, いずれにしても (彼は) 誰かを叱るだろう。」

- (36) Ekilu ə-nan kəpl-ə-k<sup>9</sup> yəmnin-Ø kəmiŋ-ə-n,  
 if 3SG-ERG beat-E-LOC my-ABS.SG child-E-ABS.SG

<sup>8</sup> JQ が述語として用いられる際には, 義務や予定などのモーダルな意味を表わす (呉人 2011)。

<sup>9</sup> コリヤーク語では, 動詞語幹に直接, 場所格, 道具格, 与格, 共同格, 随伴格などの格接辞が付加されることにより, 副詞節の述語が形成される (Kurebito 2012)。

ʔopta=qun t-ə-ja-jkəpl-ə-ŋ-ə-n (ənnə).

also 1SG.A-E-FUT-beat-E-FUT-E-3SG.O 3SG.ABS

「もし彼が私の子供を殴ったら、私も（彼を／私の子供を）殴るだろう。」

### 3.4. 不定詞構文

不定詞構文は、不定詞節で S か A は省略できるが、O は省略できないという点で、対格型を示す。ちなみにチュクチ語でも同様に対格型を示すことが報告されている (Comrie 1979)。(37) は「強くなる」という自動詞からなる不定詞の S が省略されている例、(38) は「衣類を運ぶ」という他動詞からなる不定詞の A が省略されている例である。

(37) ʔəm-nan t-ə-je-winnət-ye katʔo-ŋ nəʔel-ə-k.

1SG-ERG 1SG.A-E-FUT-help-2SG.O strong-DAT become-E-INF

「私は（あなたが）強くなるよう手伝ってあげよう。」

(38) ʔəm-nan t-ə-je-winnət-ye kimitʔ-ə-n jiwł-ə-k

1SG-ERG 1SG.A-E-FUT-help-2SG.O belongings-E-ABS.SG carry-E-INF

「私は（あなたが）衣類を運ぶのを手伝ってあげよう。」

### 4. おわりに

本稿では、コリヤーク語の能格性の度合いについて、主要な形態的・統語的現象について概観した。その結果、チュクチ語同様、コリヤーク語でも、形態、統語の両面に対格型と能格型が混在することが観察された。

具体的には、次のいくつかの点が指摘される。

- ① 名詞の格標示は一貫した能格型を示すのに対し、動詞の一致は人称・数によって対格型と能格型に分裂している。
- ② 等位構文では明確なコンテキストが与えられない限り、対格型が基本である。
- ③ 名詞修飾節では、一貫した能格型が観察される。
- ④ 副詞節では、これまで筆者が収集したデータからみるかぎりでは能格的なふるまいが観察されるが、これが構造制約によるものか、コンテキストによるものかの判断にはさらなる検証が必要である。
- ⑤ 不定詞構文は対格型を示す。

以上を、表にまとめると次のようになる。



	形態		統語			
	格標示	一致	等位節	名詞節	副詞節	不定詞
対格型		○	○			○
能格型	○	○	△	○	○ (?)	

表7 コリヤーク語の能格型・対格型の分布

なぜ、格標示は能格的なのに対して、動詞の一致は対格と能格に分裂しているのか。なぜ、等位構文や不定詞構文は対格的なのに対して、名詞修飾節（や副詞節?）は能格的なのか。形態現象、統語現象それぞれにおいて、このように格組織の反映のしかたに違いが生じるのは一体なにに起因するのか。また形態現象における対格と能格の混在と、統語現象における対格と能格の混在にはなんらかの相関関係があるのか。これらは、能格性研究におけるきわめて重要な問いであろうが、それらに答えるためには、もちろん、形態面でも統語面でもより詳細かつ網羅的なデータの分析が必要とされることはいうまでもない。

## [略語表]

A=transitive subject	ABL=ablative	ABS=absolute	ALL=allative
AN=animate	AP=antipassive	CAUS=causative	DAT=dative
E=epenthesis	ERG=ergative	FUT=future	HAB=habitual
IMPR=imperative	INF=infinitive	INSTR=instrumental	INTR=interjection
INV=inverse	IPF=imperfective	LOC=locative	O=object
PART=participle	PF=perfective	PL=plural	POSS=possessive
PRL=prolative	RES=resultative	S=intransitive subject	SG=singular
1=first person	2=second person	3=third person	

## [参考文献]

Bobaljik, Jonathan David

1998 Pseudo-Ergativity in Chukotko-Kamchatkan Agreement Systems. In: Léa Nash (ed.), *Recherches linguistiques de Vincennes*, Special Issue on Ergativity 27: 21-44.

Comrie, Bernard

1979 Degrees of Ergativity: Some Chukchee Evidence. In: Frans Plank (ed.), *Ergativity: Towards a Theory of Grammatical Relations*, 219-240. London: Academic Press.

1981 *Language Universals and Linguistic Typology*. Chicago: University of Chicago Press.

Dixon, Robert Malcom Ward

1994 *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Keenan, Edward L. and Bernard Comrie

1977 Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 8-1: 63-99.

呉人 恵

2002 「コリヤーク語の名詞句階層と格・数標示」『アジア・アフリカ言語文化研究』62: 107-125.

2008 「分詞および関係詞によるコリヤーク語名詞修飾節の相補的形成」『北方人文研究』1:19-41.

2011 「コリヤーク語の名詞化ー動作主・被動作主名詞の意味とシンタックス」『北方言語研究』1: 41-62.

Kurebito, Megumi

2008 Participial Relative Clauses in Koryak and their Typological Characterization. *Linguistic Typology of the North* 1:29-42. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

2012 Adverbial Clauses in Koryak: Degrees of Subordination and the Five Levels『北方文化研究』5:71-94.

Moll, Tat'yana A.

1960 *Koryako-russkij slovar'*. Leningrad: Gosdarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo.

Nedjalkov, Vladimir P.

1979 Degree of Ergativity in Chukchee. In: Frans Plank (ed.). *Ergativity: Towards a Theory of Grammatical Relations*, 241-261. London: Academic Press.

Silverstein, Michael

1976 Hierarchy of Features and Ergativity. In R.M.W.Doxon (ed.). *Grammatical Categories in Australian languages*, 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.

Zhukova, Alevtina Nikodimovna

1972 *Grammatika korjaskogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

## Morphological and Syntactic Ergativity in Koryak: With a Special Focus on Verb Agreement and Clause Linkage

Megumi KUREBITO

University of Toyama

This paper examines the degree of ergativity in Koryak from morphological and syntactic viewpoints, with a special focus on verb agreement and syntactic operations such as coordination and relativization in clause linkage. As far as noun phrase case-marking is concerned, Koryak is known to be a consistent ergative-absolutive language. Meanwhile, as far as verb agreement and syntax are concerned, it occupies an intermediate position between consistent accusative and consistent ergative. That is, verb agreement follows an accusative principle on the first and third person (singular, dual, and plural) as well as the second person (only singular). Coordination treats S and O in the same way, while relativization treats S and A in the same way. Although a tentative report is presented here with a few examples of infinitive constructions and subordination, further research is needed to judge correctly whether their syntactic behaviors follow an accusative or ergative principle.